

## バウムテストの主題が有する〈ゆらぎ〉の構造

佐 渡 忠 洋

心身マネジメント学科

## Structure of *Fluctuations* of the Drawing Subject in the Baum Test

Tadahiro SADO

### 要 旨

本研究の目的はバウムテストで描かれる主題の〈ゆらぎ〉の構造を明らかにすることである。本研究では、描かれる主題としての樹木そのものに一方的でなく不確定な表現可能性があると想定され、これを〈ゆらぎ〉と呼んだ。実施条件を工夫して2回のバウムテストを行う10グループを設定した後、調査は2007～2013年の間に大学生計475名（平均年齢=19.5歳）を対象に行われた。調査で収集された計950枚の描画はスクリーニング法と対評定により評価された。その結果、枝と樹冠の表現、および用紙の使い方は広い〈ゆらぎ〉を有すること、つまり、これらは樹木において相対的に変化しやすい部分であることが示され、幹と根は狭い〈ゆらぎ〉を有すること、つまり、相対的に変化しにくい部分であることが示された。この知見は、描画主題である樹木の中のどこが・どれほど変りやすい／変りにくいのかということを示唆しているため、研究者と心理臨床家にとって描かれた樹木を理解する参照枠である。

**キーワード**：バウムテスト, 描く主題, 木, 描画, ゆらぎ

### Abstract

This study aimed to clarify the structure of *fluctuation* of the drawing subject in the Baum test. In this study, it was assumed that the tree itself, to the drawing subject, had the representability of non-unidirectionality and uncertainty, which was called the *fluctuation*. After conducting the Baum test twice by devising test conditions in a setting of 10 different groups, these investigations were administered to groups comprising a total of 475 university students (mean age = 19.5 years) from 2007 to 2013. A total of 950 drawings collected during the investigations were examined using the screening method and paired rating. The results showed that the branches, crown, position, and size of the tree on paper, which are relatively changeable parts, had wide *fluctuation*; on the other hand, the trunk and roots of the tree, which are relatively unchangeable parts, had narrow *fluctuation*. This finding is a reference frame for researchers and psychotherapists to understand drawings of trees, because this suggests where and how far in the drawing of a tree the subject is likely to change/not-change.

**Keywords** : Baum test, drawing subject, tree, drawing, *fluctuations*

## 1. はじめに

バウムテストにおいて、眼前で描かれる表現を臨床家がどう受け取るかは、この技法の実践に関する根本姿勢への問いであろう。これを一般論から議論することには難しい面があるが、心理援助上の何がしかの示唆を得るために、描かれた木（以下、バウム）の意味と可能性に開かれているという点は、学派や理論を超えて共通すると思われる。しかし、臨床家のそうした姿勢を維持するためには、描く主題であるバウムそれ自体の特徴を幾らか理解しておくべきではないだろうか。バウムそのものに関するモノサシを臨床家がある程度持つならば、目の前に現れるバウムのイメージへ入り留まりつつ、実感を損なうことなく既存の研究知見をより活用した理解が可能になると考えるためである。

人の特徴で変わりやすい所とそうでない所があるように、おそらくバウムにも移ろいやすい部分とそうでない部分がある。この仮定が許されるなら、たとえば次のように考えることができる。バウムの変わりやすい部分には描き手の移ろいやすいものが反映されやすい、あるいはバウムの変わりやすい部分に描き手の恒常性の高い人格特徴を見ることは論理的に矛盾する、そしてバウムの変わりにくい部分が系列的な表現で変化したのなら相当の体験が描き手に生じたことを暗示するかもしれない、など。もちろん、系列表現でバウム形態に変化がなくなると、その意味するものは変わっている可能性もある。

再検査信頼性について取り組んだこれまでの研究（青木、1980 など）によって、個人のバウム表現は概ね安定していることが示されている。とはいえ実際、同じ描き手のバウム表現は複数回の間に大きく変化したり、また変化しなかったりすることを、多くの臨床家は経験しているだろう。しかし、どこが・どれほど変わりやすいのか／変わりにくいのかという、主題バウムの特徴を詳らかにする研究はこれまでほとんど行われてない。臨床家はそうしたモノサシを、おそらく自身の実践経験から徐々に構築していくのだと推測される。けれども、日本のバウムテスト研究史が半世紀以上を閲し、膨大な知見が集積され、臨床場面で本技法が頻繁に活用されている今日、「主題バウムとはそもそもどういった特徴を有するのか」という問いの下で、この点を議論する意義はあると考える。

そこで本研究ではまず、バウムが変化すること／しないことの両面を合わせて、〈ゆらぎ〉という言葉で言い表す。たとえば「可変性」などではなく、わざわざ新しい語を用いる理由は、第一に、再検査信頼性の高さという従来の知見とは別の水準で議論を進めるためであり、第二に、変わることにのみ着目して一面的な理解に陥ることを避けるためである。そして第三に、すでに多くの分野で指摘されているように（たとえば、山本・鷹野、2004 など）、〈ゆらぎ〉が意味する不確かさ、つまり、

ある所までは予測可能だが予測不可能な部分が多分にあることを前提として議論を進めるためである。したがって、ここでは〈ゆらぎ〉を、表現可能性としての一方向的でない常に不確かさをもつ幅、との意味で用いる。

以上より本研究では、バウムという主題には何がしかの〈ゆらぎ〉の構造ないし特徴があると仮説を立てた。そして、この仮説を検証するために同一対象者に2度のバウムテストを行った10種類の調査結果を包括的に検討し、〈ゆらぎ〉の特徴を探索的に検討する。

## 2. 方 法

### 2.1 対象と手続き

調査対象は、次の10の調査に参加した東海地区の非臨床群の大学生475名（平均年齢=19.5歳、標準偏差=1.78歳；男性162名、女性313名）で、調査期間は2007～2013年である。

同日群：私立大学の陸上部員69名。1回目の実施後、そのまま続けて2回目を同じ条件で実施。集団法。用紙は縦長制限（佐渡ら、2013）。

差込群：私立大学の理学療法専攻者67名。1回目の実施後、質問紙（SOC-13日本語版）を行い、そのまま続けて2回目を同じ条件で実施。集団法。用紙は縦長制限。

1週群：私立女子大学の幼児教育専攻者42名。1回目を実施した1週間後、同じ条件で2回目を実施。集団法。用紙は縦長制限（佐渡ら、2013）。

3ヵ月群：私立大学の幼児教育専攻者22名。1回目を実施した3ヵ月後、同じ条件で2回目を実施。集団法。用紙は縦長制限。

実施法群：国立大学の教育学部生48名。カウンターバランスをとって個別法と集団法とで2度実施。実施間隔は1～6日。用紙は縦長配布（佐渡ら、2014）。

縦横群：私立女子大学で幼児教育専攻者32名。カウンターバランスをとって用紙を縦長と横長とで同日に続けて2度実施。集団法（佐渡ら、2015）。

大小群：国立大学の教育学部生33名。カウンターバランスをとって用紙をA4とB5サイズで同日に続けて2度実施。集団法。用紙は縦長制限（佐渡ら、2015）。

操作小群：国立大学の看護学専攻者48名。1回目を実施後、続けて2回目を教示「今のとは違う実のなる木を描いて下さい」で実施。個別法。用紙は縦長配布（佐渡、2016）。

操作大群：国立大学の運動部員54名。1回目の実施後に樹種を尋ね、続けて2回目を教示「今描いて下さった〇〇（樹種）とは違う形の〇〇を描いて下さい」で実施。個別法。用紙は縦長配布（佐渡、2016）。

未来群：私立大学の幼児教育専攻者59名。1回目を実施後、続けて2回目を教示「今描いた木の50年後を描

いて下さい」で実施。集団法。用紙は縦長制限（佐渡ら，2015）。

調査はすべて同一の見守り手が実施した。特に言及しない限り、実施はA4判白紙画用紙と4B鉛筆を用い、教示「実のなる木を描いて下さい」で実施した。

この10の調査は、多くの者が日常生活において受ける刺激を、あるいは描画時に生じうる態度や環境の変化を考慮して計画された。つまり、深い体験や強烈な経験、あるいは治療的介入以外で描画時に生じうる諸要素を、2回の実施法を工夫することで作り上げ、それらがバウムにどのような影響を与えるか／与えないかを、この全10群を通して検討できるよう設定した。以下の議論はこのことを前提とする。

なお、1回のバウムテストで2本以上のバウムを描いた者、用紙を縦長に制限したが横長で使用をした者のデータはすでに除外してある。

## 2.2 評定と分析

得られたバウムはスクリーニング法と対評定の2つの方法で検討する。

### 2.2.1 スクリーニング法

部分的形態を捉える指標を多数用いて網羅的に検討する方法で、多くの先行研究で採用されてきた分析法である（坂本ら，2012）。本研究では「バウム全体を大まかに捉えるほどよい数の指標」との目的意識を立て、Koch（1957/2010）の指標を参考に、評定のしやすさも考慮して、10カテゴリー・27個の読み取り指標を作成した（表1）。この指標群に合致するか否か、臨床心理士3名が全バウムを個別に評定した後、その評定結果を照らし合わせ、2名以上の評価が一致したものを最終評価とした。そして、同一対象者の2枚のバウム間で指標との合致が変化したか否かを吟味し、変化した人数を「変化人数」、その頻度を「変化頻度」とした。

### 2.2.2 対評定

山中（1973）が双生児研究で用いた評価法を参考したもので、同一対象者の2枚のバウムを見比べて比較するものである（佐渡ら，2013）。同一対象者が描いた2枚のバウムを左右に並べて提示し、「大きさ&位置」「描線」「幹」「幹上部」「枝」「樹冠」「根」の形態部ごとに、表現が「大変似ている」「似ている」「どちらとも言えない」「似ていない」「全く似ていない」の5段階で評価するよう、臨床心理士3名に個別に求めた。その際、「似ていない」「全く似ていない」と評価した場合、その具体的な差異を記述することも求めた。「大変似ている」から「全く似ていない」の評価結果は、順に1～5点に置き換え、評定者3名の平均値をそのバウム対の最終値とした。

## 2.2.3 分析

詳細については、結果を提示する際に述べることにする。特に、本研究のスクリーニング法で得られた値は、採用した指標の質と数に左右されるが、その点も考察部分で議論する。

## 3. 結果と考察

### 3.1 指標単位によるスクリーニング法の結果

まず、スクリーニング法の検討結果から考える。

表2に、10群それぞれの27個の指標の変化頻度を提示し、全10群におけるそれらの平均値と標準偏差を導き出した（表では「10群のMean±SD」で記しており、以下この平均値を「基準ゆらぎ」と記す）。この「基準ゆらぎ」は、種々の要因によって表れた各指標の<ゆらぎ>の程度だと考えることができる。さらに、475名から得たバウム全950枚において、各指標に合致した人数と頻度も提示した（表では「全バウム 人数（%）」で示しており、以下この頻度を「基準頻度」と記す）。「基準頻度」は、非臨床群の大学生において各指標に合致する表現がどれほど認められるかという、一応の基準と仮定できる。各指標の「基準ゆらぎ」と「基準頻度」の双方が導き出されたことから、試みとして「基準頻度－（基準ゆらぎ×1/2）」と「基準頻度＋（基準ゆらぎ×1/2）」の計算式を使い、<ゆらぎ>を考慮した場合に想定される出現頻度の程度を算出した（以下これを「想定頻度」と記す）。この「想定頻度」は、バウム表現を比較する調査研究や臨床家をもつ基準として、考慮されてよい出現頻度の幅と考えることができよう。

たとえば最も分かりやすい点を取り上げて言うならば、枝がまったく描かれない「枝なし」は、調査全体で50%の出現頻度を示し、その「基準ゆらぎ」は21であった。つまり、今日の大学生の半分は枝を描くという一応の基準を見ることができ、枝の有無は大学生のおおよそ5人に1人の割合で変化する可能性を、逆に言えば、5人に4人の割合で変化しない可能性をもっていると考えられる。それゆえに、非臨床群の大学生では「想定頻度」として40～61%を一つの拠り所とできる。さまざまな要因が働く中で描き手がバウムテストを2度経験すると、その2枚のバウムにはある程度の変化が認められるかもしれない。調査でも臨床場面でも、描き手が実際のバウムテストをどう体験しているかは一概に言えないけれど、枝の有無に意味を感じるならば、見守り手は上述した<ゆらぎ>の程度をどこか心に留めつつ解釈する方がよい、となる。

表 1 スクリーニング法における読み取り指標

カテゴリー	指標名と説明
用紙用途	幹下縁立：幹の根元が用紙下部の縁に立つもの (K, 85-86 ; N, 46)。Koch は幹の根元を捉える指標としているが、ここでは用紙の使い方を捉える指標とした。 上縁はみ出し：バウムが用紙上縁からはみ出している場合 (幹に限定されない) (K, 237-238 ; N, 58)。 左右はみ出し：バウムが用紙の左右の縁の一方あるいは両方からはみ出しているもの (幹下部や根は考慮しない)。「上縁はみ出し」とは別に意味があると考えて指標に採用した。
描線	多重線：バウムのどこかに重ねて描かれた描線があるもの。描線はバウムの印象に強く影響を与えるので、指標に採用した。 断線：バウムのどこかに途切れた描線があるもの。「多重線」と同じ理由で指標に採用した。
幹の構造	一線幹：輪郭がなく一本線で描かれている幹 (K, 73-74 ; N, 36)。 幹上直：幹上部がはんだ付けされたように直線的に閉じられたもの (K, 85, 190-194 ; N, 44-46)。 根元の広がり：幹の根元が広がっているもの。本研究は発達に着目するものではないから、Koch の「まっすぐな根元」ではなく、幹下部の「広がり」に着目した。 曲がった幹：幹が曲がっているもの。幹の中間部の形態を捉える指標とした。
幹の表面	幹表面の描写：幹表面に描写があるもの。ここでは描写の有無のみに注目した。
枝の本数	枝四本以下：枝が四本以下のもの (樹冠の下にある枝も数える)。「四本」は便宜上の数である。 枝五本以上：枝が五本以上のもの。採用理由は「枝四本以下」を参照。 枝なし：枝が描かれてないもの。したがって、1 枚のバウムは「枝四本以下」「枝五本以下」「枝なし」のいずれかに必ず合致することとなる。
枝の構造	全一線枝：全ての枝が一本線で描かれたもの。Koch の「一線枝」と同じ (K, 74-76 ; N, 46-47)。 全二線枝：全ての枝が二本線で描かれたもの。Koch の「二線枝」とは若干異なる (K, 76-78 ; N, 46-47)。 一&二線混合：一本線の枝と二本線の枝が両方あるもの。Koch の「一部一線枝」は「二線枝」と重複して評価されるが、ここでは分けて考えることとした。したがって、枝を持つ 1 枚のバウムは、「全一線枝」「全二線枝」「一部一線枝」のいずれかに必ず合致することとなる。 分枝あり：主枝に枝分かれがあるもの。ここでは分枝の有無にだけ注目した。
樹冠	丸い樹冠：丸い形をした包冠線 (線は途切れていてもよい)。Koch の「球形樹冠」は“閉じた”樹冠を捉えるので、本指標とは異なる (K, 170-172 ; N, 52-57)。「波線の樹冠」ではない丸い樹冠を意味する。 波線の樹冠：波線で描かれた包冠線 (途切れていてもよく、波線であれば丸くても四角っぽくてもよい)。 その他の樹冠：上の「丸い樹冠」と「波線の樹冠」に当てはまらない樹冠 (包冠線)。 樹冠なし：樹冠 (包冠線) のないもの。したがって、1 枚のバウムは「丸い樹冠」「波線の樹冠」「その他の樹冠」「樹冠なし」のいずれかに必ず合致することとなる。 葉あり：樹冠の部分に葉があるもの。
根	根あり：根が描かれたもの。Koch はで「一線根」と「二線根」に言及しているが (K, 152-153 ; N, 55)、ここでは根の有無のみに注目した。
実	実多種：二種類以上の実があるもの。Koch の「樹幹における主題の変化」では葉と花とで異種と判断するのは難しいと考え (N, 54-55)、実が二種類か三種類以上かで区別した。 実一種：一種類の実があるもの。採用理由は「実多種」を参照。したがって、実が描かれている 1 枚のバウムは、「実多種」「実一種」のいずれかに必ず合致することとなる。
バウム以外	地面描写：地面や地平線があるもの。Koch の「ほのめかされるだけの風景」と同義 (K, 244-245 ; N, 59)。 付属物あり：バウムと「地面描写」以外に何らかの付加物的な描写があるもの。Koch の「付属品」や「多くの風景」などなすべてここに含まれる。

※ Koch (1957/2010) と中島 (2011) は指標の定義を理解する資料でもある。参照できるよう前者を「K」、後者を「N」と略記し、続けて頁数を記しておいた。

※ これらは佐渡ら (2013) で用いた指標と同じだが、指標名と定義は修正を加えてある。

### 3.2 カテゴリー単位によるスクリーニング法の結果

表 3 に、10 群それぞれのカテゴリー単位での変化頻度を提示し、全 10 群におけるそれらの平均値と標準偏差を導き出した。カテゴリー内の変化頻度を算出する際、カテゴリーの中の 1 つ以上の指標に変化が認められた場合、カテゴリー内の変化人数を 1 と数えた。また、視覚的に理解するために、全 10 群の平均値を図 1 に示した。さらに、この平均値と標準偏差をそれぞれ 3 分割したクロス表を作成し、そこに各カテゴリー名を配置した (図 2)。ここでの平均値と標準偏差は異なる側面を示していると理解できる。つまり、平均値は<ゆらぎ>の広狭を表していると考えられ、値の高さは当の形態部が変化し

やすさを、値の低さはその逆を意味しているだろう。他方、標準偏差は<ゆらぎ>の規則性を示していると理解でき、値の高さは変化する程度がどれほど描画場面 (あるいは条件) に規定されるかの程度を、値の低さはその逆を意味していると考えられる。

これより、バウム各部位を相対的に捉えた場合、「用紙用途」「描線」「枝の本数」「枝の構造」「樹冠」は変化しやすい部分で、逆に「幹表面」「根」「実」は変化しにくい部分であると考えられた。さらに、変化しやすい部分のうち、「用紙用途」と「樹冠」は描画場面によって大いに変化する時と然程変化しない時があると理解できた。

表2 指標単位でのスクリーニング法結果 (%)

カテゴリー	指標	同日群	差込群	1週群	3ヶ月群	実施法群	縦横群	大小群	操作小群	操作大群	未来群	10群の Mean±SD	全バウム人数 (%)	想定頻度
用紙用途	幹下縁立	22	6	12	18	4	19	18	0	6	12	12±7	186 (20)	14~26
	上縁はみ出し	25	12	12	23	4	31	15	0	2	20	14±10	133 (14)	7~21
	左右はみ出し	22	9	12	14	2	25	18	2	9	19	13±8	111 (12)	6~19
描線	多重線	25	10	21	32	29	25	18	15	19	19	21±7	346 (36)	26~47
	断線	12	3	5	9	10	3	12	9	11	7	8±3	64 (7)	3~11
幹の構造	一線幹	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	1±2	4 (0)	0~1
	幹上直	3	0	0	0	0	0	0	4	0	0	1±1	4 (0)	0~1
	根元の広がり	22	12	14	14	6	19	27	30	22	14	18±7	781 (82)	73~91
	曲がった幹	7	6	7	0	0	3	3	2	7	2	4±3	24 (3)	1~5
幹の表面	幹表面の描写	17	13	21	41	25	6	15	11	11	20	18±10	411 (43)	34~52
枝の本数	枝四本以下	25	7	31	32	8	22	21	36	24	10	22±11	199 (21)	10~32
	枝五本以上	23	13	29	14	10	19	24	30	28	15	21±7	273 (29)	19~40
	枝なし	23	16	17	36	6	3	9	45	37	14	21±14	471 (50)	40~61
枝の構造	全一線枝	4	3	7	5	0	0	3	4	15	5	5±4	33 (3)	1~6
	全二線枝	26	10	17	32	10	13	18	45	33	14	22±12	390 (41)	30~52
	一部一線枝	7	6	2	0	6	6	9	9	9	7	6±3	45 (5)	2~8
	分枝あり	23	9	14	5	4	3	21	26	20	8	13±9	175 (18)	12~25
樹冠	丸い樹冠	10	3	2	9	2	3	0	15	28	3	8±9	58 (6)	2~10
	波線の樹冠	25	7	12	14	6	6	24	51	65	22	23±20	699 (74)	63~86
	その他の樹冠	23	3	10	5	8	3	27	15	22	14	13±9	112 (12)	6~19
	樹冠なし	13	4	7	0	2	0	12	26	26	8	10±10	71 (7)	2~12
	葉あり	12	4	19	9	4	9	12	13	13	3	10±5	81 (9)	4~14
根	根あり	19	15	10	18	8	16	24	17	20	3	15±6	312 (33)	26~41
実	実多種	12	3	14	18	4	9	9	2	0	8	8±6	92 (10)	6~14
	実一種	22	4	21	14	4	13	9	2	15	19	12±7	777 (82)	76~88
バウム以外	地面描写	19	6	14	14	10	22	12	2	15	3	12±7	282 (30)	24~36
	付属物あり	20	16	29	23	10	19	9	0	7	32	17±10	175 (18)	10~27

表3 カテゴリー単位でのスクリーニング法結果 (%)

	同日群	差込群	1週群	3ヶ月群	実施法群	縦横群	大小群	操作小群	操作大群	未来群	10群の Mean±SD
用紙用途	41	19	31	41	8	56	36	2	13	34	28±17
描線	32	13	26	41	35	28	27	23	28	24	28±7
幹の構造	32	15	21	14	6	19	30	34	30	15	22±9
幹の表面	17	13	21	41	25	6	15	11	11	20	18±10
枝の本数	38	21	38	41	13	22	27	55	44	20	32±13
枝の構造	39	22	31	41	15	16	33	55	52	20	33±14
樹冠	42	13	31	23	15	16	36	57	74	25	33±20
根	19	15	10	18	8	16	24	17	20	3	15±6
実	22	4	21	23	4	13	9	2	15	20	13±8
バウム以外	32	19	33	32	17	38	21	2	22	34	25±11

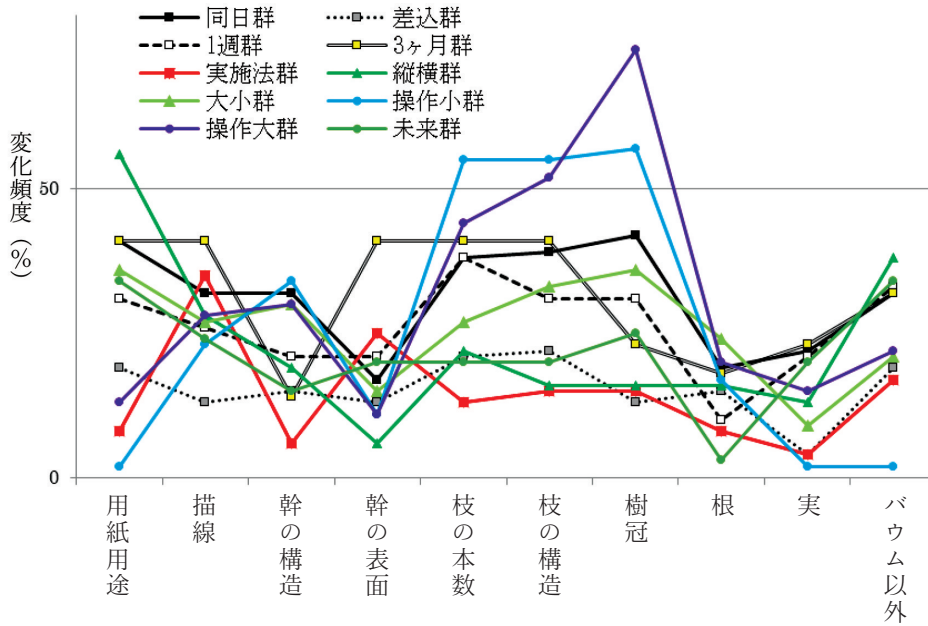


図1 10群におけるカテゴリー単位の変化頻度

		“ゆらぎ”の規則性		
		低い (SD = 16~20)	中程度 (SD = 11~15)	高い (SD = 6~10)
“ゆらぎ” の広狭	狭い (Mean = 13~19)			・ 幹の表面 ・ 根 ・ 実
	中程度 (Mean = 20~26)		・ バウム以外	・ 幹の構造
	広い (Mean = 27~33)	・ 用紙用途 ・ 樹冠	・ 枝の本数 ・ 枝の構造	・ 描線

図2 カテゴリーごとにみた“ゆらぎ”の特徴

### 3.3 スクリーニング法が抱える課題

ここまで、バウム対をスクリーニング法により評価し、その結果まとめる手法で<ゆらぎ>の特徴を抽出しようとしてきた。しかし、既に触れておいたように、この手法が抱える課題をはっきりとさせておく必要がある。そこで、坂本ら (2012) を参考にしつつ、本研究に関わるスクリーニング法の問題を2点が挙げたい。

第一に、部分的な形態を捉える指標を多数用いても、その総和は元のバウム全姿を表さないことである。したがって、本研究では「バウム全体を大まかに捉えるほどよい数の指標」との意図で読み取り指標を設定したが、これらの指標がバウム全姿を十分に捉えているわけではない。つまり、本研究ではバウム対の十分な比較によって<ゆらぎ>の特徴を抽出したことにはならない、との批判が成り立つ。しかしながら、本研究ではこの課題を十分認識した上で、バウム形態部を具体的に検討できるという有用性の方を評価し、スクリーニング法を採用した。

第二は、指標選択のバイアスに関わる問題である。用いた指標以外は検討の対象とはならないため、この指標

群では<ゆらぎ>の特徴を十分に捉えていない可能性があり、さらに、カテゴリーでの検討では、その中の指標の性質と量に結果が大きく左右されてしまう、との批判が考えられる。しかし筆者は、このバイアスはある意味で不可避のものとする。指標は文脈でその心理学的な意味も重みも変化する。そのため、第一の問題とも関連するが、あらゆるバウムを十分に検討できる指標群が確立されてはいないし、確立できるわけでもない。また、多くの指標を使えば使うほど、かえって微細な表現を検討してしまうというデメリットもある。したがって、指標選択に対する批判は一部甘受し、ここで見出された結果は批判的検証を要するとしておかねばならない。

バウムの検討方法に関してそもそも共通認識を持つことに困難があるが、スクリーニング法に付随する諸課題のために、上の結果の理解には注意を要する部分がある。そこで、絵の読み手の印象をもってなされる対評定の検討結果を使って、スクリーニング法の結果を見なおし、得られた知見をさらに吟味したい。

表4 対評定の結果

	同日群	差込群	1週群	3ヶ月群	実施法群	縦横群	大小群	操作小群	操作大群	未来群	10群の Mean±SD
大きさ&位置	3.0	2.2	2.7	2.4	2.7	3.4	2.8	2.5	2.6	3.2	2.8±0.37
描線	2.7	1.7	2.5	2.5	2.7	2.2	2.4	2.0	2.1	2.3	2.3±0.32
幹	3.1	2.2	2.8	2.7	2.9	2.9	3.0	3.0	3.3	3.0	2.9±0.29
幹上部	2.9	1.8	2.6	2.0	2.2	2.2	2.7	3.0	2.8	2.0	2.4±0.43
枝	3.0	1.8	2.6	2.6	2.2	2.3	2.8	3.4	3.3	2.1	2.6±0.52
樹冠	3.6	2.2	3.0	2.4	2.7	3.2	3.4	3.9	4.1	3.1	3.2±0.62
根	2.9	1.8	2.6	2.1	2.2	2.5	2.7	2.3	2.5	1.9	2.4±0.35

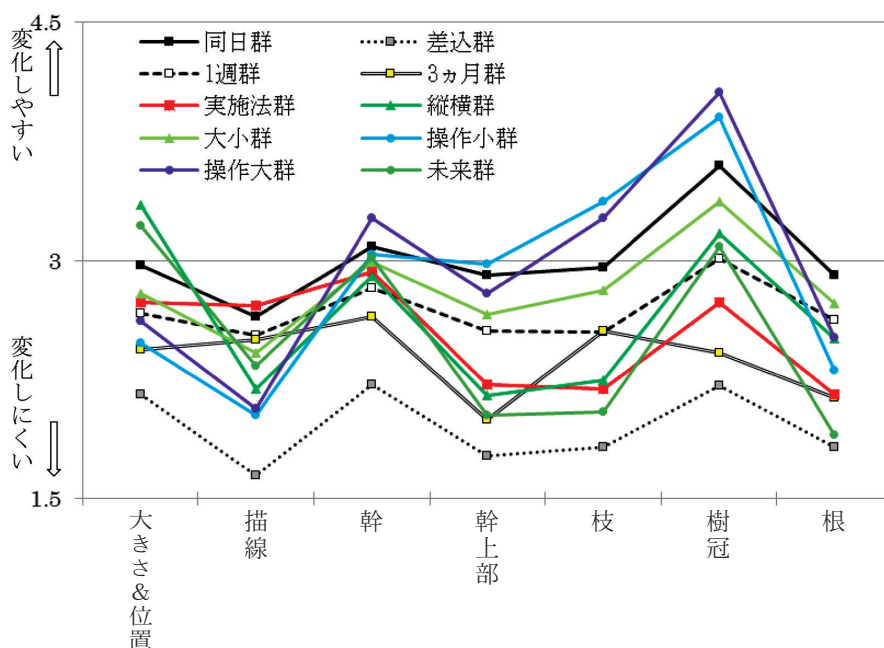


図3 10群における対評定結果

### 3.4 対評定の結果

対評定で導き出された10群それぞれの平均値と、全10群の平均値および標準偏差を表4に示した。

同一対象者が2枚のバウムを描くのだから、再検査信頼性が概ね認められているように、結果が「変化しにくい」(数値では3未満)に傾くことは首肯できる。しかし、10群の形態部ごとの平均値を見ると、群間で高低にバラつきはあるものの、形態部ごとの概ね類似した結果を認めることができる——図3の線グラフがそれをよく示している。すなわち、各形態部を相対的に理解した場合、本結果からは「描線」「幹上部」「根」は変化しにくい部分であり、「樹冠」は変化しやすい部分であると読み取れうる。そして、先述したカテゴリー単位によるスクリーニング法の結果と対比させると、「樹冠」は変化しやすい部分で、「根」は変化しにくい部分という類似点が見出されうる。しかし、両方法の結果には「描線」と「幹」で相違があるため、この点を考えてみたい。

### 3.5 スクリーニング法と対評定の結果の相違

描線には、筆跡学という学域の存在が示唆するように、当人の個性が滲み出やすい。上で認められた相違点は、本研究のスクリーニング法と対評定が異なる側面から描線を捉えていた結果として理解できる。つまり、スクリーニング法は描線を形態的に捉え、対評定は描線を印象的に捉えていた可能性が高い(筆の止めや払いのような癖などを)。これはある意味、対評定の方法論もそれ独自の課題を有していることを示唆するものであるが、ともあれ、両検討法での相違はいわば当然といえる。したがって、描線の<ゆらぎ>の解釈は保留しておくべきであろう。

次は幹である。対評定で「似ていない」や「全く似ていない」と評価された場合、その具体的な差異の記述を評定者らには求めていた。幹に関するその記述を見ると、幹表面への描写に言及したものがほとんどで、幹の太さの差異を指摘するものは若干あったが、幹の形状に差異を認めた記述はほとんど無かった。したがって、幹表面

の描写が対評定の結果に強く作用した可能性が高いため、上の相違点に関しては、幹の形状は変化しにくいというスクリーニング法の結果の方を採用するべきであろう。

### 3.6 <ゆらぎ>の特徴

スクリーニング法と対評定の結果を総合して考えると、バウムという主題がもつ<ゆらぎ>の特徴は、次のように要約できる。

**枝と樹冠の表現、および用紙の使い方は、バウムの中でも<ゆらぎ>の程度が広い特性をもる。特に、樹冠は敏感に変化する形態部である。**

**幹と根は、バウムの中でも<ゆらぎ>の程度が狭い特性をもつ。**

本知見は、幹は素質ないし内的規定性に支配され、枝葉は環境ないし外的規定性に影響されやすいとした山中(1973)の報告と重なる部分がある。つまり、この結果はある部分で、山中が双生児研究から論じた仮説を裏付ける形になったとともに、彼とは違う側面から主題バウムの特徴を一部明らかにした。

なお、得られた知見の内、変化しやすい形態部が幹先端処理(藤岡ら, 1971)と関連している点は興味深い。バウム描画において誰しもが突き当たる幹上部での描画課題は、幹と樹冠部(枝・樹冠)が交錯する点でなされるのだから、幹先端処理として現れる表現には、変わりやすい部分と変わりにくい部分、外と内、内的規定性と外的規定性とが合わさる場所だと考えられる。これは幹先端処理の解釈仮説や意味を今後考えていく上で重要な示唆である。

ここでは<ゆらぎ>という観点に基づいて議論を進めてきた。しかし、見方を変えると、ここで導き出された結果は形態規定性という点で自然のことかもしれない。幹は2本線を引けば形を作ることができる。一方、枝と樹冠にはそれ自体様々な表現手段がある。したがって、本研究は各バウム形態部がそもそも有する規定性の程度を、<ゆらぎ>という言葉に置き換えたに過ぎないと批判が成り立つだろう。ただし、形態規定性という観点からは、そこがどの程度(どれほどの割合で)変化するか/しないのかへの議論に進むこと、さらにその参照枠を臨床家がもつことは難しい。いくらか確率論的な見方も備え、臨床場面でも調査場面でも心理臨床家の拠り所となる観点としては、<ゆらぎ>として考える方が有益であろう。

### 3.7 臨床と研究への寄与

導き出された<ゆらぎ>の特徴は、バウムのどこが・どれほど変わりやすい/にくいのかに関する理解の枠組みである。最後に、これがどのように今後の研究と臨床

に寄与するかを考える。

第一に、得られた<ゆらぎ>の特徴は、本稿冒頭でも触れたような、バウムの中で変わりやすい部位と変わりにくい部位によって描き手が投影する心性に相違があるかもしれない、というゆるい仮説をもたらす。たとえば、感情のように刹那的で変わりゆくものは、<ゆらぎ>の幅が広い樹冠部に表れる可能性がある、との視点を持つことになる。また、人の環境世界が常に変わりゆくように、環境世界との関わりをも樹冠部に見ることができるかもしれない。あるバウム形態部と関わり合いの強い心性について、バウムテスト研究においてはこれまで十分検討されてこなかった。しかし今後、こうした解説仮説を洗練させる試みにおいて、本知見は大いに役立つだろう。

第二に、表現療法では作品を系列的に理解する重要性がよく説かれるが、その点でも本知見は活用できる。すなわち、変わりやすい部分とそうでない部分という大まかな枠組みを持ってこそ、系列表現を見比べながら理解することが一層促進されうる。同時に、表現の一回性という点でも本知見は臨床家の拠り所になる。一回性の表現には当然、不確かな要因が多く介在する。それでも、描き手のところが主題バウムを通じて立ち表れることだけは確かであろうから、どうしてこの表現が今なされたのか、という問いを臨床家が持ち続けることを、この知見は助けるだろう。

第三に、<ゆらぎ>というパースペクティブを持つということは、臨床家がバウムという主題そのものに主体性を見ることにつながるかもしれない。バウムを生けるものとして見るような、アニミズム的と表現できるこの考えは、いわばバウムが如何にしてその場(描き手と見守り手の)に語りかけているかを熟考することでもある。つまり、主題バウムが抱える不確実さを認識することは、心理療法においてイメージを重視し、イメージの自律性を尊重する視点を一層もたらすだろう。

## 4. おわりに

本稿は、バウムという主題が何がしかの<ゆらぎ>の特徴を持つと考え、10種類の調査結果を分析・解釈した。その結果、バウムの中でも幹は変化しにくく、枝と樹冠は変化しやすい形態部であることが示唆され、こうした理解の枠組みがバウムを解釈する臨床家の拠り所になることが考察された。結果を理解する方法論に課題を残すとはいえ、本試みによって<ゆらぎ>の構造をいくらか導き出すことができたならば、所期の目的を達成することはできた。

## 付 記

本研究は名古屋大学に提出した博士論文の一部に加筆したものである。ご指導いただいた森田美弥子先生に感謝申し上げます。



## 引用文献

- 青木健次「投影描画法の基礎的研究（第1報）——再検査信頼性」『心理学研究』第51巻1号、9-17頁、1980年
- 藤岡喜愛・吉川公雄「人類学的に見た、バウムによるイメージの表現」『季刊人類学』第2巻3号、3-28頁、1971年
- Koch, K. *Der Baumtest: der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3.Auflage. Bern: Hans Huber. 1957. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男訳『バウムテスト [第3版] ——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』誠信書房、2010年
- 中島ナオミ『バウムテストの発達指標に関する研究』甲子園大学博士論文、2011年
- 佐渡忠洋・松本香奈・田口多恵「バウムテストにおける再検査信頼性の見なおし」『岐阜女子大学紀要』第42号、29-39頁、2013年
- 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史「個別法と集団法のバウムテストにおける幹表面の表現の比較」『臨床心理学』第14巻2号、256-263頁、2014年
- 佐渡忠洋・松本香奈「用紙の向きとサイズを変えて実施したバウムテストにおける「はみ出し」表現の検討」『臨床心理身体運動学研究』第17巻1号、25-36頁、2015年
- 佐渡忠洋「バウムテストの枝と包冠線について——「否定」の教示を用いた調査から」『箱庭療法学研究』第29巻2号、67-75頁、2016年
- 坂本佳織・佐渡忠洋・岸本寛史「バウムテスト研究におけるスポットライト分析」『心理臨床学研究』第30巻1号、41-50頁、2012年
- 山本光璋・鷹野到和『ゆらぎの科学と技術——フラクチュオマティクス入門』東北大学出版会、2004年
- 山中康裕「双生児による基礎的研究」林勝造・一谷彊編著『バウム・テストの臨床的研究』日本文化科学社、1-26頁、1973年